
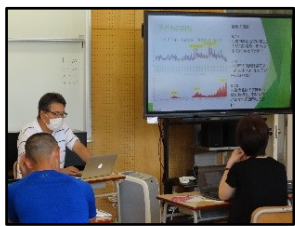
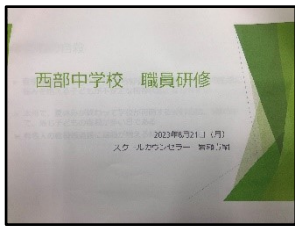


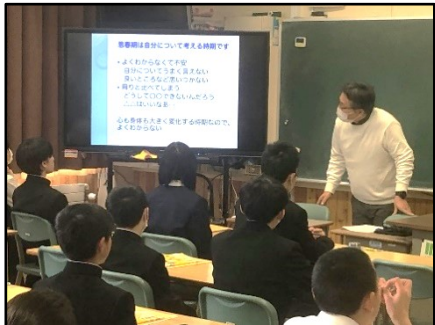
# 自殺予防教育プログラム実施報告書

学校名	北広島市立西部中学校
-----	------------

## (1) 教職員間の共通理解を図る研修等の実施

研修等の実施日	令和5年8月21日(月)	研修参加人数	16人
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの自殺の現状と傾向について</li> <li>・ 思春期と自殺について</li> <li>・ 自殺関連行動の心理等について</li> <li>・ 自殺のリスク因子について</li> <li>・ 子どものSOSサインについて</li> <li>・ 学校の対応と医療との連携について</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p style="text-align: center;">【教職員間の共通理解を図る校内研修】</p>		
研修に参加した教職員の声	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心理的視野狭窄の危険性がわかり、子どもが自殺以外の手段が思い浮かばない状態になる前に、寄り添う必要がある。</li> <li>・ 子どもの考えや気持ちを否定せず、「TALK」の原則を守って対応するなど、傾聴する、安心させる、一人にしないという学校の初期対応の重要性について、全教職員で改めて共通理解を図る必要がある。</li> </ul>		
研修等で使用した資料名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「令和5年版自殺対策白書」(厚生労働省資料)</li> <li>・ 「教師が知っておきたい子どもの自殺予防」(文部科学省資料)</li> <li>・ 「子どもたちのSOSにきづき耳を傾けるための実践研修資料」(北海道保健福祉部資料)</li> <li>・ 「自殺関連行動に係る具体的対応のためのガイドブック【教師用】」(札幌市教育委員会及び北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野資料)</li> <li>・ 『「SOSの出し方に関する教育」を始めましょう!』(道教委資料)</li> <li>・ 「自殺予防教育プログラムの活用」(道教委資料)</li> </ul>		

## (2) 「自殺予防教育プログラム」の実施

	実施状況(主な実施内容、アセスメントツール等による生徒の変容、生徒の感想等)
A 援助希求的態度の育成	<p>○ 実践の概要(目的、対象学年、実施教科等、実践者、指導内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どのようなことでも誰にでも相談し合える集団作りを目指し、全学年の特別活動の授業において、スクールカウンセラーが、生徒に対し、一人一人の考え方は異なることを理解し、互いに尊重し合うコミュニケーションの考え方やコミュニケーションスキルを習得する指導を行った。</li> </ul> <p>○ 生徒の変容を促す工夫(授業における工夫、他教科等との関連、事前・事後指導、外部人材の活用など)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒がスクールカウンセラーとの信頼関係を築くことや専門的な知見からの指導を受けることにより、コミュニケーションスキルの向上に向けて興味・関心をもつことができるよう、スクールカウンセラーによる授業を全学年で複数回実施した。</li> <li>・ 生徒が思春期の考え方の特徴や物事に対する一人一人の捉え方の違いについて知り、コミュニケー</li> </ul> <div style="text-align: right;">  <p>【スクールカウンセラーによる授業】</p> </div>

ションのとり方について考えることができるよう、他者の意見を聞くことができる対話の場を意図的・計画的に位置付けた。

- 生徒の変容 (アセスメントツール「ほっと」等による生徒の変容)
  - ・ 6月と12月に実施した「ほっと」において、「相談」の項目が、全ての学年で0.2ポイント以上増加するなど、悩みを相談しやすい雰囲気醸成が進んだ。
- 生徒の感想
  - ・ 自分の考え方の癖を知ること、他人とは考え方が異なることを知り、他人の考えを尊重すると同時に、自分の気持ちをわかってもらえるように話すことが大事だと思った。
  - ・ 否定的な気持ちになった際に、反対の意見についても考えることで気持ちが楽になることを知り、友だちの悩みなどを聞けるようになりたいと思った。



【コミュニケーションのとり方について交流する様子】

	第1学年	第2学年	第3学年
1回目 (6月)	3.4	3.1	3.4
2回目 (12月)	3.6(+0.2)	3.4(+0.3)	3.8(+0.4)

【「ほっと」における「相談」の項目の数値】

A 援助希求的態度の育成

- 実践の概要 (目的、対象学年、実施教科等、実践者、指導内容)
  - ・ 「いじめはどんな理由があっても許さない」学校づくりを目指し、特別活動の授業において、「いじめ撲滅集会」を小学校第6学年と中学校全学年の合同で実施した。
  - ・ 小学校の児童会役員と中学校の生徒会役員が事前に内容を話し合うなど、児童生徒が集会を企画・運営した。過去の自殺の事例をとおしてどうするべきだったかを自分事として考えさせる活動により、いじめ撲滅を訴えた。集会の後、学校、地域及び家庭の3つの輪を表すシトラスリボンを一緒に制作し、差別のない学校、地域づくりを意識させることができた。
- 生徒の変容を促す工夫 (授業における工夫、他教科等との関連、事前・事後指導、外部人材の活用など)
  - ・ 生徒がいじめについて自分事として捉えることができるよう、教師からの一方的な指導ではなく、児童会及び生徒会に「いじめ撲滅集会」の内容を考えさせるなど、実施方法を工夫した。
  - ・ 西部地区全体でいじめを撲滅する意識をもつことができるよう、地域と共に取り組んでいるシトラスリボンの製作を、小・中学校で合同で取り組んだ。
- 生徒の変容 (アセスメントツール「ほっと」等による生徒の変容)
  - ・ 中学校第3学年が、4月に実施した「全国学力・学習状況調査」に比べ、全校生徒で12月に実施した「生活アンケート」では、「いじめはどんなことがあっても絶対にいけないことだと思うか」という設問において、「どちらかという当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した生徒が第1学年と第3学年で0%となるなど、変容が見られた。
- 生徒の感想
  - ・ シトラスリボンの作り方を、小学生に教える活動を通して、差別をなくすように願いながらリボンを作ることができた。
  - ・ いじめはどんなことがあっても、いけないことだと強く思った。



【小中合同「いじめ撲滅集会」】



【シトラスリボンの製作の様子】

学年	いじめは許さない			
	4月 (%)		12月 (%)	
回答	3	4	3	4
第1学年	—	—	0.0	0.0
第2学年	—	—	2.4	2.4
第3学年	2.0	2.0	0.0	0.0

【全国学力・学習状況調査生徒質問紙(4月)及び生活アンケート(12月)の結果】

※「いじめは許さない」項目における「3. どちらかという当てはまらない」「4. 全く当てはまらない」の変化

- 実践の概要
  - ・ストレスによる健康への影響を知ることにより、他人を許容する態度の育成を目指し、中学校第1学年の保健体育科「心身の発達と心の健康」の授業において、保健体育科教諭が、生徒一人一人が自分の抱えているストレスの状態を知り、外的要因に対して受容的に考えて対処する授業を行った。
  - ・ストレスがある時の心身の変化について知り、その原因となる要因について理解を深めることを目指し、中学校第1学年の保健体育科の授業において、学習内容を基に、自分自身の生活を振り返り、現在のストレスの状況や対処の方法について考える授業を行った。
- 生徒の変容を促す工夫（授業における工夫、他教科等との関連、事前・事後指導、外部人材の活用など）
  - ・生徒が他人の考え方等を理解し、ストレスの状況や対処の方法について知ること、他人を許容し仲間意識を高めることができるよう、対話により意見を交流する時間を多く設定した。
- 生徒の変容
  - ・6月と12月に実施した「ほっと」において、「参加」の項目が、全ての学年で0.1ポイント以上増加するなど、生徒の仲間意識の高まりが見られた。
- 生徒の感想
  - ・些細なことでも周囲に相談しようと思った。
  - ・体を動かすことがストレス解消によいということが分かり、積極的に運動しようと思った。

	第1学年	第2学年	第3学年
1回目（6月）	3.4	3.3	3.3
2回目（12月）	3.5(+0.1)	3.5(+0.2)	3.6(+0.3)

【ほっと】における「参加」の項目の数値】